

研究所だより

第431号
2021年 7月 7日
発行：土佐清水市教育研究所
TEL 82-3015

“名も知らぬ 遠き島より 流れ寄る 椰子の実一つ
故郷の岸を離れて 汝(なれ)はそも 波に幾月(いくつき)
旧(もと)の木は 生(お)いや茂れる 枝はなお 影をやなせる”
『椰子の実』 作詞：島崎藤村 1936年(昭和11)日本の歌曲



～半夏生・小暑～

7月2日(火)は「半夏生」。夏至(6/21)の頃から11日目を指すようです。「半夏(はんげ)というサトイモ科の薬草が生える頃ですよ。」ということを知らせる雑節のひとつです。半夏(が)生(える)から「半夏生」と呼ばれている訳です。昔から農作業の目安として「田植えは夏至の後、半夏生までに終わらせる」という言い伝えがあり、これは「半夏半作」とも呼ばれ、半夏生よりも後になると秋の収穫量が減ってしまうとコメ農家の間では言われていたそうです。「7日(小暑)から『暑中』に入り、暑さが日増しに加わり、梅雨明け前のため台風に見舞われることも多い」と言われています。

7月2日に沖縄地方の梅雨明けが発表されましたが、平年より11日(昨年より20日)遅い夏の到来だそうです。高知県もカラッと晴れた晴天が続く夏が早く来ることを願いたいですね。暑い夏を快適に過ごすためにも、新型コロナウイルス感染症や熱中症等の対策と合わせて色々な対策を準備しておきたいものです。

特集 アセスメントの必要性

【指導と評価 7月号より】

教師自身のアセスメント

あいざわ のぶひこ
会沢 信彦 教授 (文教大学教育学部)

1 魔の6月

新年度から2ヶ月がたった。新しい子どもたちとの授業や学級経営もスムーズに行えるようになってきた。あとひと月強、このままいけば何とか夏休みにたどりつけそうだ。

と思っていたところが、最近、どうも子どもたちの様子がおかしい。チャイムが鳴っても席に着かない子が増えた。授業中のおしゃべりも目につく。そして、休み時間にしばしばトラブルが発生する。

これまでは子どもを叱る場面も多くはなく、また、注意すれば聞いてくれる子どもたちだった。しかし、最近はいちいち叱りつけてしまうことが増えた。感情的になり大きな声を出してしまうこともある。子どもたちの不服そうな様子も手にとるようにわかる。指示に従わない子が少しずつ増え、さらに叱責の回数が増える。そうこうするうちに、これまではなかった、あからさまに反抗したり、授業中に平気で立ち歩く子も現れてきた。子どもたちとの心の距離がじわじわと離れてゆくのを感じられる。そして、授業が成立せず、学級がくずれてゆく…。

「魔の6月」「6月危機」と言われる現象である。この危機を乗り越えるためには、的確な学級アセスメントに基づいた適切な介入が必要である。詳細は、河村茂雄や赤坂真二の著書にゆだねたい。

それとともに、このようなピンチは、教師と子どもとの関係性、そして教師自身を振り返る絶好のチャンスでもある。

2 なぜ問題行動に走るのか

社会人1年目の高校教員として、著者もこのような危機を体験した(会沢、2016)。そのときに助けとなったのは、アドラー心理学であった。



ドライカースは、「子どもの不適切な行動の4つの目標」を指摘している。子どもにとってもっとも重要な欲求は所属欲求であり、それが満たされない(「クラスに居場所がない」「教師から認められ、愛されていない」と感じると、やむをえず教師を相手役として、①～④を目標とする不適切な行動を起こすのだという。

- ①注目・関心を引く
- ②権力闘争を行う
- ③復讐する
- ④無気力・無能力であることを誇示する

ドライカースによれば、不適切な行動の目標をアセスメントする手段は、相手役である教師の感情であるという。

- ①注目・関心……いらだちを感じる
- ②権力闘争……腹が立つ
- ③復讐……傷つく
- ④無気力・無能力……諦め

「子どもの行動のいらだちを感じることなど日常茶飯事だ」という教師は少なくないと思われる。しかし教師と子どもとの間に基本的な信頼関係が存在し、子どもが引き起こす問題に教師が冷静に対応していれば、多くの場合関係が悪化することはない。しかし、教師が注意や叱責を繰り返すと、いらだちが怒りに変わってくる。そうすると要注意だ。

私の社会人1年目の出来事は、完全に権力闘争だった。生徒の行動に腹を立て、「何とかして言うことを聞かせたい」という思いでいっぱいであった。若気のいたりとはいえ、いまとなっては恥ずべきエピソードである。

教員を対象とした研修会等で、私はしばしば「子どもに対して一度も腹を立てたことのない方はいますか?」と問いかける。もちろん手をあげる教師はいない。私は、情熱をもって教育にたずさわっている教師であれば、子どもの言動に腹を立てることがあるのは当然だと考えている。しかし、多くの場合、事後に「言いすぎたかな」「〇〇君に対してだけ厳しすぎたかな」と反省する。そして、何かしら〇〇君や学級全体に対してフォローする。さらに誠実な教師であれば、帰りの会や翌日に、「今日(昨日)の叱り方はよくなかった。反省している」と謝罪するはずである。子どもとの間に基本的な信頼関係ができていれば、おそらくそれ以上くずれることはない。

問題は、このような自分を振り返ることができず、怒りが収まらないがために、「何としてでも言うことを聞かせてやる」「目に物見せてやる」と感じる場合である。そして、叱責はいつそう強くなり、怒声はますます大きくなる。こうなると、子どもが黙って引き下がることはない。「自分を傷つけた教師に復讐することで何とか一矢報いよう」とする。つまり、あえて教師を傷つける言動をとる。こうなると、お互いの信頼関係は完全にくずれているので、教師と子ども(たち)だけで問題を解決することは困難になる。複数の子どもがこの状態に陥ると、学級はもはや秩序を保てなくなる。

しかし、教師は権力を有しているため、物理的に子どもをおとなしくさせることはできてしまう。すると子どもは完全に意欲を喪失し、無気力・無能力であることを誇示することで、かろうじて居場所を確保しようとする。その結果、教師が子どもを見放し、指導・援助を諦めてしまうことは、教育にとって最悪の事態である。

先述のように、筆者は、権力闘争まではやむをえないと考えている。大切なのは、ここで己を振り返ることで、復讐まで悪化させないことである。

3 子どものまなざし

ドライカースの理論によれば、子どもが不適切な行動を起こすのは、所属欲求が満たされていないと感じているからであると述べた。いいかえれば「勇気をくじかれている」状態だとアドラー心理学では考える。

ドライカースは「植物が太陽と水を必要としているように、子どもは勇気づけを必要としている。不幸にも、もっとも勇気づけの必要な子どもが最小のものしか得ていない」と述べている。つまり不適切な行動を起こす子どもに必要なのは、「勇気づけ」なのである。



アドラー心理学の基本概念である「勇気づけ」については、明確な定義があるわけではない。八巻(2015)は、勇気づけを永続的に進んでいくためには、単なるスキルのレベルではなく「『技術』『理論』『思想』の3つのレベルを包括した考え方と振る舞い方」である「勇気づけスタンス」が重要であると述べている。

筆者は、「勇気づけスタンス」のもっとも基本的なものは、相手への「まなざし」ではないかと感じている。目の前の子ども、とくに問題を起こす「困った子」に対して、A「だめな子、悪い子」と見るか、B「いまはたまたま問題の部分がクローズアップされているものの、実はよいところもたくさんある、可能性に満ちた子」と見るかである。

Aの見方をすれば、問題行動はその子が悪い子だから起こすのであり、彼・彼女は加害者である。一方、Bの見方をすれば、彼・彼女は実は「困っている子」であり、学校生活や家庭生活、あるいは人生そのものに「苦戦している子」ということになる。つまり、彼・彼女は、むしろ被害者であり、問題行動という形でSOSを発していると考えられる。

従来から指摘されているように、このBの見方こそが教育相談の大前提であるが、筆者は、教育の大前提でもなければならぬと考えている。子どもへの指導や支援がうまくいかないとき、まず最初にしなければならないことは、どちらのまなざしで子どもたちと接しているかの自己点検である。

4 まずは心身の安寧を

私たちはまた、相手からのまなざしについても敏感に感じることができる。子どもであっても大人であっても、相手から肯定的なまなざしを感じれば、こちらも安心して相手と関わるができる。しかし、相手から否定的なまなざしを感じると、やはり心穏やかではいられない。しかし、このような相手こそ、実は援助が必要な人であるはずである。

中井(2011)は、「善人と悪人というんじゃなくて、余裕のある人間と、余裕のない人間とがあるんだろう」と述べている。こちらのかかわりに対して否定的なまなざしを向け返す人は、「勇気をくじかれている人」、「(本人が)困っている人」であるが、彼・彼女らは、実は「余裕のない人」でもある。

ところで、Bのまなざしを送る必要のあるもう一人の相手がいる。自分自身である。

寝不足で体調の悪いとき、出かけに家族と言い争いをしたとき、職場の上司から注意を受けたとき、何かしらのミスをしたとき、私たちは余裕をなくす。そのようなとき、子どものちょっとしたおしゃべりを過剰に注意したり、同僚にきつい言葉を投げかけたりしてはいないだろうか。そのような自分にはっと気づき、率直に謝罪できればよい。しかし、そうでない場合、その積み重ねが相手との信頼関係にヒビを入れることになる。

自身の心身の状態に敏感であるとともに、自身の心身を安寧に保つことができることが、教師にとってもっとも重要な資質・能力であると思われる。



＝引用文献＝

- ・会沢信彦「教師のアドラー心理学」八巻秀編 特集「学校現場で活かすアドラー心理学」『子どもの心と心理学』第14号、45～54頁、2016年。
* 研究所所蔵：「3ステップであんしん 気になる子への対応術」
- ・中井久夫『「つながり」の精神病理』筑摩書房、2011年。
- ・八巻秀「勇気づけ」鈴木義也・八巻秀・深沢孝之『アドラー臨床心理学入門』アルテ、100～110頁、2015年。

◎参考図書

- ・河村茂雄『崩壊しない学級をめざして—教師・学級集団のタイプでみる学級経営』学事出版
- ・研究所所蔵：『学級集団づくりゼロ段階—学級経営力を高めるQ-U式学級集団づくり入門』図書文化
- ・赤坂真二『アドラー心理学で変わる学級経営：勇気づけクラスづくり』明治図書

お知らせ

＜市民図書館より新しいDVD（平和教材）の紹介＞

皆様のご利用をお待ちしています。

〔問い合わせ：市民図書館 82-4151〕

①「おじゃる丸/わすれた森のヒナタ」(再生時間 29分)

戦後70年の夏におくる 忘れてはいけない物語。

ある夏の日、ピクニックに来たおじゃる丸たちが遊んでいると、いつの間にか知らない子がまじっていた。チャンバラが得意な元気な女の子“ヒナタ”。おじゃる丸と少女ヒナタとの出会いと冒険、そして別れを通して、かつての戦争の時代の悲しみを伝える物語。



②「永遠の0」(再生時間 144分)

司法試験に落ち続け、人生の目標を失いかけた青年・佐伯健太郎と、フリーライターの姉・慶子は、実の祖父だと思っていた賢一郎との血のつながりがなく、本当の祖父は太平洋戦争で特攻により戦死した宮部久蔵という人物であることを知る。久蔵について調べ始めた2人は、祖父が凄腕のパイロットであり、生きることに強く執着した人物であったことを知る。そんな祖父がなぜ特攻に志願したのか。元戦友たちの証言から祖父の実像が明らかになっていき、やがて戦後60年にわたり封印されてきた驚きの事実にとどろき着く。



③「あの日のオルガン」(再生時間 119分)

第2次世界大戦末期に保母(保育士)たちが幼い園児たちとともに集団で疎開し、東京大空襲の戦火を逃れた「疎開保育園」の実話を戸田恵梨香と大原櫻子の主演、山田洋次作品の多くで脚本、助監督を務めてきた平松恵美子の監督、脚本により映画化。1944年、第2次世界大戦末期の東京。警報が鳴り、防空壕に避難する生活が続く中、品川の戸越保育所では園児たちの安全を確保するため、保母たちが保育所の疎開を模索していた。ようやく受け入れ先として見つかった埼玉の荒れ寺で疎開生活をスタートした若い保母たちと園児たちは、日々噴出するさまざまな問題に直面しながら、互いに励まし合いながら奮闘していく。



④「風立ちぬ」(再生時間 126分)

ゼロ戦設計者として知られる堀越二郎と、同時代に生きた文学者・堀辰雄の人生をモデルに生み出された主人公の青年技師・二郎が、関東大震災や経済不況に見舞われ、やがて戦争へと突入していく1920年代という時代にいかに生きたか、その半生を描く。幼い頃から空にあこがれを抱いて育った学生・堀越二郎は、震災の混乱の中で、少女・菜穂子と運命的な出会いを果たす。やがて飛行機設計技師として就職し、その才能を買われた二郎は、同期の本庄らとともに技術視察でドイツや西洋諸国をまわり、見聞を広めていく。そしてある夏、二郎は避暑休暇で訪れた山のホテルで菜穂子と再会。やがて2人は結婚する。菜穂子は病弱で療養所暮らしも長引くが、二郎は愛する人の存在に支えられ、新たな飛行機作りに没頭していく。

